

モニタリング手法の選択と設計：イノシシ編

株式会社 野生動物保護管理事務所
濱崎 伸一郎

講演要旨

イノシシは狩猟資源として価値が高いが、その一方で鳥獣による農業被害の約 1/3 を占め、古くから人との軋轢を生じてきた動物である。

近年、温暖化による積雪の減少により、イノシシは北陸地方、東北地方などの多雪地域に急速に分布を拡大している。また、中山間地域の過疎化と土地利用の変化に伴って人間活動領域への出没頻度が高まっており、適切な管理の重要性が増している。

■ イノシシの特徴

イノシシは東北地方から南西諸島まで広く分布している。性成熟が早く、一産あたり産子数は平均 4 頭で我が国の大型哺乳類の中では潜在的増加率が最も高い。ただし、出産率や幼獣の死亡率は天候や餌資源量によって変化するため、年による個体数の変動も大きい。雑食性であり、季節によって食性が変化するため、比較的大きな行動域と多様な環境を必要とする。

■ 生息数と捕獲数

階層ベイズモデルにより 2016 年度末の全国の生息個体数は 89 万頭と推定されている。個体数は年による増減を伴いながら上昇していたが、ここ数年は横ばいからやや低下する傾向が認められている。捕獲数は 2010 年度以降に顕著に増加しており、2016 年度の捕獲数は 62 万頭に至っているが、その多くは狩猟以外の許可捕獲が占めている。

■ 農作物被害と被害対策

2017 年度のイノシシによる農作物被害金額は全国で 47.8 億円であり、鳥獣被害全体の 36.3% を占める。トタン柵、ワイヤーメッシュ柵、電気柵などの被害防止柵の設置が進み被害は低下傾向にあるが、適切な設置方法の普及と維持管理が課題となっている。

■ モニタリング手法

イノシシは警戒心が高く藪環境を好むため目視が困難であること、糞が残存しにくく糞量を密度指標にしがたいことなどから生息数に関する調査法の開発が遅れている。試行を含めて現在行われている個体数モニタリングは、出猟カレンダー調査による目撃効率や捕獲効率、痕跡密度調査、カメラトラップによる撮影頻度などである。また、農業被害については、従来の鳥獣被害統計のほか、集落アンケート、農作物共済データが使われている。分布の急速な拡大と都市部周辺への出没頻度上昇への対応のため、個体数管理の必要性が高まっており、広域管理の観点からも全国共通のモニタリングの実践が求められている。